

## 第一生命経済研究所のホームページご紹介

アドレス：<http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/top.cgi>（「第一生命経済研究所」で検索可能）  
1月上旬までに上記ホームページに登場したレポートテーマの一例をご紹介します。このほか数多くの詳細な経済分析レポートが掲載されていますので、経済研レポートと合わせてご活用ください。

～企業物価指数の課題、及び外需主導の景気とリスクについて各機関の見方を紹介しています。

2007/12/11 「民間調査機関の経済見通し（2007年12月）」

2007/12/5 「企業物価指数基準改定の概要と課題」

掲載カテゴリ：日本経済分析チームによる「日本経済の羅針盤」

～新たな波乱要因に激動する世界のマーケットについてコメントしています。

2008/1/7 「Market Watching Weekly Market Report」（毎週月曜配信）」

掲載カテゴリ：鳥峰義清の「マーケットウォッチング」

～サブプライム問題に関する米国現地取材の報告と低下する日本の貯蓄率について分析しています。

2008/1/7 「貯蓄率はどうして低下したのか？」

2007/12/11 「サブプライム問題に関するヒアリング」

掲載カテゴリ：熊野英生の「金融市場の謎を解く」

～注目される米国ほか海外経済の情報をお届けします。

2008/1/11 「海外 経済指標・イベント予定 ” Weekly Global Economy ”」（毎週金曜配信）」

2008/1/7 「パキスタン情勢：ブット元首相暗殺の政治経済的意味と今後の影響」

掲載カテゴリ：桂畑誠治の「米国経済を探る」、「アジア経済」

### 編集後記

昨年同様、年の初めに10年前を振り返ってみた。1998年はロシア危機に加え、国内では金融システム不安が高まり、長銀、日債銀が破綻し国有化されている。暗い、重たい話題の多い年だった。結局この年は実質経済成長率1%を超えるマイナス成長に終わった。

今、国内外を見比べて気になるのは、そこから10年の時間の早さ、あるいはこの間の「景色」の変化だ。日本経済はその後ITバブル崩壊があったにせよ、21世紀に入ってもしばらく混迷から抜け出せなかった。同じ時期、海外では経済環境の移り変わりは足取りを早めたように見える。日本の前を走る米国の背中がずっと遠くなったこと、EUの統合効果が実を結んで新しい地域としての基盤を固めたことも変化だが、欧米以外の地域がここまでパワーアップすることを10年前どれだけの人が予想できたのだろうか。

今回また世界の金融市場は動揺に見舞われている。しかし今のところ、米国から欧州を巻き込んだサブプライム問題の混乱が、全世界の経済を失速させる状況はかろうじて避けられている。その背景にはいわゆるBRICsなどの新興国経済が世界の枠組みの中で新たな柱に育ったことがある。かつて金融危機の最中にあったロシアは、今やエネルギー大国として存在感を誇示しており、日本に次いで世界第三位の外貨準備高を積み上げるに至った。しかも最大の外貨準備保有国は中国に取って代わられた。インドの躍進もまた著しい。

再び98年に戻るが、経済白書の副題は「創造的発展への基礎固め」だった。飛躍への足掛かりを固め、軽やかに伸びる国々を見るにつけ、日本経済が未だデフレからの回復過程に片足を残しているのは、なんとも歯がゆい。世界の市場と一体化して経済が成長する今日、日本経済の課題はむしろ国内景気である。内需の勢いを無駄に削がないためにも、今年はOWN・ゴールまがいの失策は願い下げである。（H. U）